広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第13巻 第1号（2010）97～105頁

バングラデシュ農村における子牛給付による奨学プログラムの比較事例研究

日下部　達　哉
（広島大学教育開発国際協力研究センター）

1．背景とプログラムの概要

本研究は、日本の教育支援NGOによるバングラデシュ初等教育奨学施策の展開について、2004年から開始した二つの農村でのアクションリサーチの成果を比較検討しようとするものである。

バングラデシュの初等教育は、1990年のEFAに呼応して以降、就学率など数値のうえでは、2007年において97％という、めざましい進歩を遂げた。この裏には、1993年からのFood for Education（教育のための食料計画）と、2003年からそれに取って代わったStipend for Education（教育のための給付金計画）という金品配布政策が功を奏したものだといわれている。と同時に、多くの途上国同様、なかなか向上しない「ラスト10％」の就学率向上が課題にもなっている。そして初等教育の量的拡大がある程度達成された後には、初等教育の質向上と中等教育の拡充という課題も横たわる。

周知の通り、こうした状況に対して、バングラデシュでは、政府のみならずNGOの活動によって状況改善をしようとする動きが、建国間もない70年代ごろから盛んに行われてきた。世界最大級のNGOであるBRACは、ノンフォーマルの教育を行うため、2006年には、32,000校の学校を持ち、約100万人の生徒数に達する勢いをみせた。これは、バングラデシュの全生徒の8％がNGOの学校に通う状況であり、隣国インド同様、こうしたNGOの存在を前提とした初等教育拡充政策が、量的拡大において機能したといえる。

基本的にこれらNGOスクールのうち8割はBRACスクールが占めているといわれる。残り2割のうち、さらに小規模ながらも、日本から教育を対象とした援助が行われている。『国際協力NGOダイレクトリー2004』（JANIC出版）では、バングラデシュで活動している日本のNGOの半数（29のうち14）は教育を対象としている、としており、多くはスラムでの基礎教育普及や補習授業を活動対象にしている。このような学校建設などの直接的支援については、農村における奨学プログラムに「子牛給付」という手法を用いるユニークな援助手法を紹介するとともに、既に二つの村で展開されているこのプログラムの成果を比較的に検討していくことを目的とする。

詳細は後述するが、この子牛給付の手法を考え出したのはバングラデシュのダッカからバスで二時間ほどのところにあるムンシゴンジュ県ベズガウ村出身の、シャヘ・アロム氏である。氏は、日本の大学の教育学部出身者であり、日本から帰国後、現在はダッカで、バングラデシュ観光のガイドや通訳を行うほか、出身の村で私立学校を建設し、経営に携わっている。洪水の際に炊き出しを行ったり、村人の雇用創出のため、バス会社の経営を無給で行ったりと、忙しい毎日を送っている。

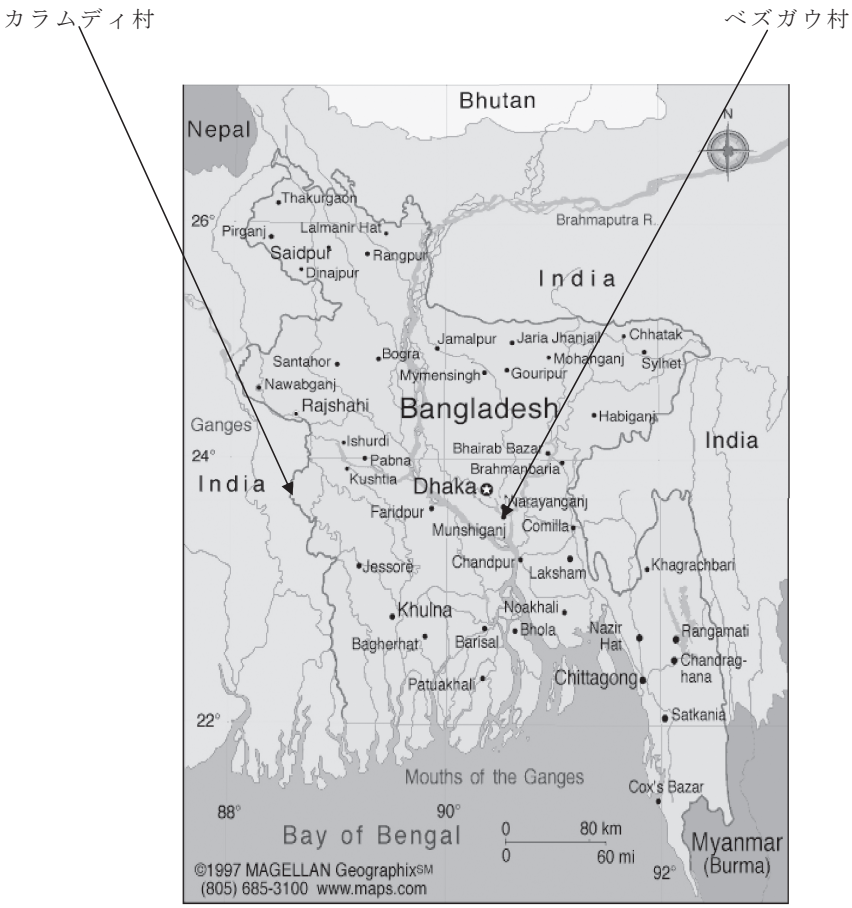
プログラムの概要は、子牛を小学生のいる貧困世帯に配布し、成牛まで育てさせ、子牛が産まれたら、その子牛は実施主体が引き取り、別の世帯に配布するというもの

で、生きた子牛を給付する点において奨学金事業とは異なっている。しかし、なぜ現金ではなく牛なのか、といえば被給付者の側の努力によって、予想される経済効果が異なっていることがあげられる。理想としては、子牛を成牛に育てる過程、また育てた後で、以下にあげるような付加価値が生み出されることである。

①牛の糞などを燃料や肥料として活用できる。
②子牛を出産後、ミルクができ、20tk（タカ）／kg（1tk＝約2円）で売れる。または家族で飲用することができる。
③成牛に成長させたあとは、また子牛を産ませる、あるいは牛を売って10000～15000tk程度の金をつくることができるため、中等教育の学資として、あるいは病気などの緊急時に、売って活用できる。

何といっても、2年程度飼育を続ければ、受給した子牛の貨幣価値が、2－3倍に上がるため、家計にとっては大きな助けになる。10000-15000tkという額は、2010年時点では小学校の一般教員給与の約2カ月分にあたる。むろん、これらの利益は、牛を日常的に飼育する作業が積み重なって初めて可能になることである。牛は言うまでも

（地図）調査対象村の位置



給付された牛と受給世帯の子ども

牛市場から子牛を連れ帰るところ

なく生き物であり、日常の世話、病気の対応など家族はかなり牛に割く時間をつくらなくてはならなくなる。また、③に関して、基本的に、子牛の受給世帯には子どもを中学校に就学させることが求められているが、緊急時に牛を売ることを制限してはいない。

本論では、発案者であるシャヘ・アロム氏の出身村である、ダッカ近郊のムンシゴンジュ県ベズガウ村と、この手法を取り入れた援助を展開している僻地的性格をもつメヘルプール県カラムディ村との比較研究を行うことを目的としたい。ベズガウ村における実施主体はシャヘ・アロム氏個人で、子牛の購入費用について「アルス in 福岡」という福岡の NGO から援助を受けている。カラムディ村については、地元の NGO ションダニ・ションスタが実施主体で、こちらも福岡にある「子牛の貯金箱」という NGO から子牛の購入費用について援助をうけている。基本的な枠組みとしては、近郊農村的性格をもつベズガウ村と僻地農村的性格をもつカラムディ村の比較という比較事例研究の枠組みを設定する。比較の前提となる各村の記述については、参考文献欄に記した二冊の報告書を素材にしている。

2．近郊農村モデル－ムンシゴンジュ県スリノゴル郡ベズガウ村の事例（2004 年より調査開始）

ベズガウ村は、ダッカからバスで二時間ほどの近郊農村であり、バングラデシュでは、十分にダッカへの通勤圏である。そのため、人・モノの移動が大変盛んである。また、賃金レベルも他の農村に比べて高く、発案者であるアロム氏の指導によるアクションリサーチが、ベズガウ村ではじめられた。数頭の子牛を個人的に給付し、様子を見ようとしたのである。2000 年頃、こうした実践を知った日本の NGO であるアルス in 福岡という小規模な国際協力 NGO が援助をアロム氏に申し出た。当初、アロム氏は、あまり規模を大きくする意図をもっていなかったが、「無理に活動の拡大をせず、アロム氏が出来る範囲で活動を行う」ことを条件にして、資金の受入が決まった。そこで小規模ではあるが、子牛の購入代金として 2001 年に 10 万円、その後 4 年かけて毎年 5 万円ずつ援助を行うという取り決めをし、それをアロム氏個人が選定した世帯に、牛を給付していく、というゆるやかな取り決めのもと、村内で本格的に始められ、援助が開始された。

援助する側である NGO アルス in 福岡の構成メンバーは平均年齢 75 歳以上の女性たち

十数名という珍しい構成であり、援助の効果というよりも、プログラムを通じてバングラデシュの貧困を学ぶ、また、ひとまずプログラムの成功・失敗は問わず、当初の方法を5年間続けて、後に成果を分析する、というゆるやかな取り決めをしていた。ただし、アクションリサーチであるため、中間的な観察は行う必要があることから、筆者が可能な限り村の訪問を行い、効果の測定を行うこととなり、開始から二年ほど経った2004年、「子牛受給世帯のその後」を調査することになった。子牛は、二年経っていれば成牛となり、何らかの効果がでていてもおかしくないからである。また効果がでていなくても、その原因究明などを行う必要性があり、効果を出すべく示唆することも可能な時期であった。

実際に子牛を受領した世帯ではどのように飼育が行われ、また、調査対象とした10世帯においてどのように牛が活用されているのかに注目して行きたい。むろん、飼育や活用のあり方が全く同じということはないが、大まかにわけてカテゴリA：飼育を三年間継続した事例、カテゴリB：牛が流産した事例、カテゴリC：牛を売った事例、カテゴリD：牛が死んでしまった事例、カテゴリE：子牛が産まれ、ミルクによる収入を得ている事例、の5つの事例に分類した。

2004年調査時における各事例のサンプル数

カテゴリA：飼育を三年間継続した事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・4世帯
カテゴリB：牛が流産した事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1世帯
カテゴリC：牛を売った事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2世帯
カテゴリD：牛が死んでしまった事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2世帯
カテゴリE：子牛が産まれ、ミルクによる収入を得ている事例・・・・・1世帯

結果的には、牛の飼育で良い結果を出すのはそう簡単ではないこと、意外に金がかかってしまうこと、など、むしろ課題が噴出するものとなった。子牛が死んだり、病気になったりする例が多かったのである。

方法については、村人が子どもにかけている教育についての期待を実現するためには、想定通りに進めば有効な手段であるといえた。子どもは、親からの期待をうけて、将来的にはチャクリー（賃労者）になりたいと考える子は多く、親の教育にかける期待の中で最も多い答えは「経済力が続く限りより上の教育段階まで教育を受けさせたい」というものである。ムンシゴンジュで、月に1000tkをミルクで稼ぐことができれば、カレッジの授業料やある程度までの教材費ならまかなえる。また、中等教育進学ともなれば、準備のための資金を、牛を売ることで資金に換えることもできる。

しかし牛を飼うために、どのくらいの費用が必要なのか。明らかになったことは、まず、子牛を受け取って、飼い始め、レンガの床や牛小屋（正確な数字は不明だが計2000tkと仮定）、蚊帳（二つで1000tk）など準備するために最低でも3000tkが必要となる。さらに、約400tk／月の飼料代がかかっており、ミルクを出すようになるまで2～3年かかるとすれば約10000～15000tkの費用が必要となる。さらに獣医に二回診察させ、薬を出してもらったとして、一回500tk、つまり牛がミルクを出すまで総計で20000tk近くかかることになる。つまり、一頭目を成牛にするだけでは採算がとれないのである。

現時点でこの額を出すには、あまりにも家庭経済が不安定な世帯が多いと言わざる

を得ない。当然、金のかかる飼料を与えることができず、健康管理が行き届かず、牛の健康状態が悪くなっていくという事態は十分に考えられる。まして、家族の希望でもある牛が、途中で死んでしまったり、病気に罹ったり、それがなかなか治らないという状況があっては、将来の希望を絶たれたような感情に陥ってもおかしくはないかもしれない。結果として、2年経過時点で唯一、理想的な状態になっていたカテゴリEの世帯では、飼料の配合に関する工夫をしており、体調がおかしいと思ったら、獣医にみせることをしていたため良好な結果がでていた。しかし、多くの世帯では飼料を配合などせず、とってきた牧草を与えるだけであったし、金がかかるために牛を獣医にみせるようなこともなかった。

そうした事態を今後避けるため、①牛の配布を子牛からある程度成長した牛に変える（貧困世帯にはヤギなど）。②飼育指導員を配置し、観察、記録をとらせるとともに、飼育技術の指導をさせる。③②をもとにムンシゴンジュの気候に合った飼育教則を構築する。などの対策を編み出す必要があり、検討事項としてアロム氏に伝えた。また、現時点ではアロム氏の人格的なものや、知名度に大きく依存しているため、組織としての体をなしているわけではないし、事業に関する裁量を任せる人材、また細かいマネジメントを行う人材がないため、正確な実態把握を行うことが厳しい。ただし、村人のアロム氏に寄せる信頼をもとに、「ゆるやかに」援助を行っており、また無理のない規模で、というのが当初からのプログラムに対する姿勢なので、あえてこの状況でも経過を観察する姿勢を維持した。

こうした特段の対策をとらなかった必然的結果として、2007年9月の追跡調査では、2004年にも給付していた牛4頭のうち、1頭のみが成牛となり、出産し、ミルクを出している状態であった。他は継続飼育、売った、死んだ、という状況であった。現状では、こうした状況も見守りつつ、今後も援助を行っていくかどうか話し合いを続けている最中であるが、現時点では、NGOを組織してもらい、専従スタッフをつけることを条件にする、など次段階へ向けた模索が続いている。

3．僻地農村モデル－メヘルプール県ガンニ郡カラムディ村の事例（2006年度調査）

カラムディ村はバングラデシュ西端、メヘルプール県に位置しており、これまでダッカからバスで7－8時間かかるバングラデシュの中でも最僻地であった。現在はジョムナ橋を通るルートのバスに乗れば、4時間で隣町のバムンディまで到達できるようになり、幾分かは改善している。ただし、物流に影響があるレベルではなく、依然として地理的に僻地であり、バングラデシュの中でも周縁に位置付く村であることは間違いない。

ここを支援したのは、先述の、福岡にある子牛の貯金箱というNGOである。こちらはベズガウ村と異なり、最初からカウンターパートのNGOに有給専従スタッフをつけさせ、結果責任を持たせた。資金の規模も相対的に大きく、4年間で60万円程度となった。この村では、かつて奨学金を給付したことがあったが、親が使い込んだり、子どもが成績を維持できなかったりと、なんらの成果もみせない苦い経験をしていたため、支援を受けたい村人を公募で募集、選抜をし、一週間に25タカの貯蓄と、子どもを中等教育に通わせること、という契約的性質をもたせることによって運営された。管理を積極的に行った甲斐もあって、比較的成果も出ている様子であった。例えば、ほぼ全ての世帯で牛が子牛を妊娠、出産しミルクにありつけている状況であった。これは、ベ

ズガウ村ではみられなかったことであった。また、搾乳したミルクの全てを売るのではなく、家族も摂取することを義務づけた。

プロジェクトの目的とシステム

この村の活動では、このプロジェクトの目的を、中学校進学とたんぱく質の補給と明確化し、理想的には、牛を継続的に飼育することによって、経済的な自立も目指すこととした。システムは、ベズガウ村と同じく、現地NGOの運営で小学校3年生に乳牛の子牛を貸し出し、ミルクを売った資金を貯蓄し中学校の学費に当てることになっている。また、最初に生まれた子牛は、NGOに返し、その子牛は、NGOが次の奨学生（世帯）に貸し出す。ただし、その都度公募し、面接や資格審査などを経てから給付することとした。成牛となった牛は、出産後、ミルクを出すが、それを販売した収益の一部を学費として貯蓄することも義務付けた。目標額は1か月に100タカとした。米1キロが13～16タカ、中学校の学費が月に30タカ、日雇い労賃が50タカ前後と考えると十分家計を支える額をミルクによって稼ぎ出せる計算であった。現地からは毎月、奨学生の出席率と牛の出産日、子牛の性別、貯蓄額を日本のNGO子牛の貯金箱に報告させ、牛の購入額については購入月に報告がある。資金については以下の通りで、ベズガウ村のものよりも規模は大きい。

プロジェクトの資金

奨学生	送金分：円	牛購入費：タカ	事務費　他：タカ
1期生 10人	130,000	45,475	1,500
2期生 10人	120,000	44,300	1,500
3期生 16人	112,150	54,450	4,005
4期生 15人	220,000	42,500	3,480
51	582,150	186,725	10,485

1タカ≒2円
牛代＋事務費＝197,210タカ（≒394,420円）
残高　　582,150円－394,420円＝187,730円（≒93,865タカ）

以上にみられるように、この村では調査した全ての牛が、子牛出産および搾乳に結びついている。ある世帯は3頭もの牛を飼っている状況である。日本側からは、かなり厳しい目で使途や成果を現地NGOに把握させ、現地専従スタッフは、大変忙しく、給付された世帯を回り、徹底したアフターケアを行わせている。

そうした、「結果重視」の甲斐もあって、2007年9月の追跡調査時には、次第に牛の数が膨れあがり、2006年に51世帯であったのが93世帯にまで拡大し、アロム氏の構想のとおり、理想的に展開していた。ここに、本家であるベズガウ村との大きな成果の違いがみられる。2009年の調査では、牛の頭数をカウントできないほどにこの手法は拡大し、村の産業といえるほどに盛んに行われていた。村人たちは個別に子牛を貸し借りするようにまでなった。

4．比較検討

では、以下で、牛増加という成果の点と、教育プログラムとしての適切性という点から、カラムディ村での方法論とベズガウ村の方法論を比較検討していこう。

両村の展開は、（表）にまとめた通り、非常に対照的である。まず、日本側NGOとバ

ングラデシュ側カウンターパートとの関係性からみていくことにしたい。ベズガウ村では、アロム氏個人がベズガウ村で活動するようなNGO組織などに属しているわけでもなく、あくまで個人がカウンターパートとなっており、2001年当時、アルス in 福岡が管理など一切をアロム氏個人に委任する形で援助することになった。アロム氏はやはり個人的に時間の空いたとき、牛の購入や配給、また村人に対して飼育状況を聞いたりする。対して、カラムディ村では、教育と医療プログラムを展開しているNGO、ションダニ・ションスタ（以下ションダニ）をカウンターパートとし、日本で集めた資金はションダニが受け取り、牛購入および配布、その後の管理も含めた担当者がケアする形で進行している。この管理方法の違いによって、生産性には大きな違いが表れる。ベズガウ村では契約や約束とまではいかない、個人間のゆるやかな関係によって運営されるが、カラムディ村では受給される世帯は、公募に応じて選抜された人々であり、一週間に25タカの貯蓄と、子どもを中等教育に通わせること、という契約的性質によって運営される。

当然ながらこうした分析の在り方では、カラムディ村の生産性は相対的に良いものとしてとらえられる。調査したほとんどの牛が妊娠・出産しており、ミルクも順調に出ている牛が多い。また、病気に対する対応も、ベズガウ村では調査した牛が原因不明の熱、流産などで病気をしたり死んだりしている例が10世帯中3世帯あるが、いずれも突然死や獣医へ連絡の遅れなどで死亡している。これは、ベズガウ村の雨季の牛に対する湿潤ストレスが相対的に大きいことが原因である。しかし、病気や体調不良といった情報が専従職員によって共有され、受給世帯間で、情報が流動的になると素早く獣医を呼んだり、予防したりすることができる。カラムディ村ではこうしたことについて、担当者が機能したことで、ビタミンや薬など処方し、かなりの率で牛が病気から復活している。また、飼育方法についても病気の対応同様、病気予防や出産のために有利な状況にするためのアドバイスなどできるため、たった一人の専従担当者がいることだけで、予想以上に効果はあがっているようである。さらに出産したのち、ミルクを出したとき貯蓄にまわすように促し、貯金を教育費に使うような指導をしたりもしており、ベズガウ村の結果とは大きな違いがでてきている。

仮に貧困削減のみを考えれば、ベズガウ村では直ちにカラムディ村の方式に変更すべきであろう。それくらいカラムディ村の援助パフォーマンスは良好であると評価できる。しかし、信頼でき、かつその職務に時間と労力を「捧げつくす」専従担当者を見つけるのは、バングラデシュにあってはなかなか容易ではない。ベズガウ村では、学歴取得者はダッカに出て行くことが可能であり、あまり賃労働職種のないカラムディ村だからこそ従事してもらえるという点もある。また、NGOによる支援は、かならずしも生産性や効率性、ひいては経済的便益のみを追究するものではなく、両国の交流としてとらえることを前提にすれば、ベズガウ村の方法も効率性が低いからといって批判されるものではない。むしろ、現地のやりかたにゆだねた結果、うまくいった部分と失敗した部分が判明したなら、その両方のことから我々が学ぶものは大きい。結果をみることは重要だが、結果のみを見て成功か失敗かを判断するのは避けるべきである。

管理手法の問題にかぎらず、二地域の地域性もかなり異なっており、プログラム遂行に影響している。まずベズガウ村は、雨季には水に浸かってしまうというバングラデシュならではの季節性をもつため、飼育のなかでもとりわけ餌の調達について大変

厳しい状況になる。現地では毎年のことなので、生活そのものに影響はないが、こと牛飼育に限れば雨季の洪水はハオル（氾濫原）をつくり出すと、草地が狭まるためである。カラムディ村は土地が高い場所にあるためこれが全くといって良いほどない。しかし、10 － 20 年おきに大雨で水害にみまわれており、洪水に慣れていない住民が牛を死なせてしまう可能性もあり、リスクがないわけではなく洪水やサイクロンなどの天災への対応も検討する必要があろう。

プログラムの在り方と今後の展開：教育プログラムとしての適切性

では、教育プログラムとして考えればどうであろうか。これは奨学プログラムの名を冠しており、対象とした世帯にいる子ども（受給時は小学生）は、中等教育に進学することが求められている。当然ながら中等教育進学の延長線上に想定しているのは、高等教育進学か農外就業である。しかし、ベズガウ村とカラムディ村では、教育の意味が異なっている。この国にあって進学という行為は、親族をも巻き込む「一大事業」であるものの、相対的に、近くに大都市ダッカがあるベズガウ村の人々は、中学校を卒業後、チャクリーと呼ばれる賃労働にアクセスしやすい。そのため、牛を育て上げたら、おそらくその意味はカラムディ村よりも重い意味をもつ。調査で捉えた二世帯の成功

（表）ベズガウ村とカラムディ村の子牛配給プログラムの比較対照表

ベズガウ村	比較項目	カラムディ村
アロム氏個人に任せているため、時間が空いたとき、アロム氏の責任の範囲で行われる。そのため、管理されているという意識が生まれにくく、生産性は相対的に低い。	プログラム管理手法	NGO ションダニ・ションスタにプログラム管理を任せているため、担当者であるアジズ氏がほぼ毎日仕事として巡回を行う。そのため意識的にも実質的にも管理がゆきとどき、相対的に生産性があがる。
病気にかかってしまうと情報共有がなされないため、そのまま死ぬ場合が多い。		病気への対応をアジズ氏に相談できるため、予防や治療を検討でき、その結果牛の死亡を食い止められる。
ミルクなどの生産物管理がなされないため、貯蓄にまわすなどの指導がない。		ミルクなどの生産物管理がなされるため、貯蓄にまわす指導があり、着実に金がたまる。
給付基準もアロム氏任せ。そのため、日本人から見れば本当に必要なのか、と思える聖職者や、既に牛を持っている世帯などにも配られる場合がある。むろん、それも日本側はあえて黙ってみている。	子牛の給付基準	給付基準は公募による。最底辺だと牛を成牛にできる力がないので、少し経済力のある世帯に的を絞っている。おおむねばらつきはない。聖職者や富裕な人々には給付しない。
雨季にはハオル（氾濫原）ができるため、草地が制限され、餌の調達が厳しくなる。また、牛に対する湿潤ストレスも大きい。	地域性	高い場所にあるため、雨季の洪水がなく、餌の調達が比較的しやすい。ただし、災害規模が大きいとリスク管理が厳しくなる。

世帯は、その資本を元手にチャクリーに就くことがかなり容易になるはずである。

一方でカラムディ村では、なんらかのコネクションにありつき、公務員として採用されることが最大の幸運としてとらえられ、あるいは、警備員や工場労働者など、現金で月収を得られる賃金労働者が、「いまにも手が届きそうな」職種としてとらえられている。しかし、僻地農村であるがゆえに、そうした職種もきわめて限定され、中等教育進学・卒業～何らかの賃労働に就労というケースはまれで、たいていは狭小な土地で分益小作などをしながら行商人や農村工業などの兼業農をすることのほうが一般的だといえる。現在牛を飼っている100世帯以上の村人のなかでも、中学校進学、そしてチャクリーへのコースをたどる子どもが、2－3人出れば「御の字」といったレベルだろう。

つまり、中等教育への接続に焦点をあてるなら、教育プログラムとしての成果は「ほぼ同じ」なのである。どうみても成功例にしかみえないカラムディ村のケースでは、管理を徹底し、結果責任を持たせたことで、相互にストレスを抱える結果にもなっている。しかし、ベズガウ村のケースでは、日本側とバングラ側がゆるやかなつながりでつながっており、「管理する側、される側」の関係ではない。当然ながらどちらが優れていてどちらが劣っているかは簡単に判断できるものではない。本事例研究は、「教育」の協力であるからこそ、援助される側に現れる結果を、広い視野で拾い上げていくことの重要性を示唆している。

参考文献

国際協力NGOセンター（JANIC）編（2005）『国際協力NGOダイレクトリー2004』JANIC出版。

渡辺美恵子、日下部達哉（2004）『子牛の奨学金プログラム　2004年度調査報告書』NGOアルスin福岡バングラデシュ支援事業報告書。

宇治まつえ、日下部達哉（2006）『カラムディ村　子牛配給プログラム（子牛の貯金箱）　2006年度調査報告書』NGO子牛の貯金箱報告書。